

P-189

濃厚栄養流動食アイソカルプラスEXへ変更し褥瘡が改善した症例の検討

置戸赤十字病院 看護部

○山本 真美、山谷 亜美、太田 陽子、小田 斤子、櫻井眞由美、竹田 貞子、石井 圭子、清田亜貴子、佐藤 則和、山根 康昭、柏谷 朋、長谷川岳尚

【はじめに】アミノ酸の一種であるアルギニンは昨今、褥瘡あるいは創傷の治癒促進効果で注目されている。濃厚栄養流動食アイソカルプラスEX(以下アイソカルとする)はアルギニンを多く含有する。今回、褥瘡の治癒遅延の患者様に他の濃厚栄養流動食からアイソカルへ変更し褥瘡が改善した症例があったので報告する。

【症例1】90歳代女性。長期臥床し自力での体動困難で四肢拘縮が強くポジショニングを工夫したが、両腸骨に褥瘡を認め、右腸骨は褥瘡評価表(D E S I G N)にて7点、左腸骨は19点でポケット形成がみられた。アイソカル導入後右腸骨の褥瘡は完治、左腸骨の褥瘡については褥瘡評価表にて11点と縮小した。また新たな褥瘡の発生はなかった。

【症例2】60歳代男性。既往にパーキンソン病あり、自力での体動困難であった。褥瘡は仙骨に認め、褥瘡評価表にて15点でポケット形成がみられた。アイソカル導入後、肉芽形成がみられ、12点と改善し、現在継続中である。

【考察】濃厚栄養流動食において、アルギニンを多く含有するアイソカルへ変更したことが、褥瘡の改善効果に影響したと考えられた。

P-191

当院での褥瘡発生状況と入院時血清Alb値及び血清亜鉛値との関連についての検討

日本赤十字社長崎崎原爆諫早病院 栄養課、褥瘡対策委員会

○本多 倫子、小溝ゆかり、山下 沙織、富工 由貴、猪口 薫、古河 隆二

【目的】褥瘡予防のためには、ハイリスク患者を早期より選別・対応することが重要である。患者の栄養状態は褥瘡発生と深く関わり、その指標として血清Alb値及び血清亜鉛値が考えられる。前回我々は、血清Alb値と褥瘡との関連について報告した。今回は血清亜鉛値を新たな指標として褥瘡発生状況との関連について検討した。

【対象/方法】2011年度に入院した褥瘡有群 (n = 20) と、褥瘡のない患者から無作為に抽出した対照群 (n = 24) の2群で入院時血清Alb値と血清亜鉛値の関連について検討した。

【結果】血清Alb値は、褥瘡群全体では平均2.55 g/dlであったのに対して、対照群では平均3.63g/dlであった。また血清亜鉛値は、褥瘡群全体では平均42.20 μg/dlであったのに対して、対照群では平均58.75 μg/dlであった。褥瘡群は対照群に比べ、血清Alb値は1.1 g/dl、血清亜鉛値は17 μg/dl低く、共に有意な差が見られた。また血清Alb値と亜鉛値では、褥瘡の有無に関わらず相関が見られた。特に褥瘡群では血清Alb値と血清亜鉛値、共に低値である傾向が見られたが、血清Alb値は正常であっても血清亜鉛値は低い症例が見られた。

【考察】血清Alb値が正常でも、血清亜鉛値が低値である方が褥瘡発生が多かったことから、褥瘡ハイリスク患者選別のための指標として、血清亜鉛値はより有効であると思われる。今後は入院時の血清亜鉛値測定を定着させ、他の指標やAlb値・亜鉛値の経過等の検討を行い、褥瘡ハイリスク患者へのより有効な栄養管理を図ってきたい。

P-190

当院における外来透析患者の栄養状態の現状と今後の課題

武蔵野赤十字病院 透析センター

○宇原 健史、梅津 馨、岡崎 春美、齋藤 恭子、安藤 亮一

【はじめに】年々増加の一途をたどっている血液透析患者において、蛋白エネルギー栄養障害が高頻度でみられるとされているが、当院では全外来透析患者への栄養評価はAlb値のみで行っていた。透析患者も高齢化してきており、高齢透析患者の低栄養は生命予後の低下にも直結してくる。今回GNRIによる栄養評価を実施し、今後の栄養管理について検討したのでここに報告する。

【目的】外来血液透析患者の栄養状態を把握し、予測される栄養障害のリスクを回避するために、透析センターにおける栄養管理を明確化する。

【方法】対象：外来血液透析患者36名（男性22名、女性14名）GNRIを用いた栄養評価を実施した。

【成績】重症栄養リスク3名、中等度栄養リスク20名、軽度栄養リスク7名、リスクなし6名であった。リスクなしの患者でも、肥満傾向にありP値も高く二次性副甲状腺機能亢進症のリスクがある。また透析間の体重増加が多く、心不全等の合併症のリスクが高い。

【結語】今までは、月2回のAlb値のみの栄養評価であった。今回、用いたGNRI評価で6割が中等度以上のリスク患者であり、Alb値のみでは十分な栄養評価ではなかったことがわかった。また、外来患者には各自プライマリー看護師が関わってはいたが、看護師個々の判断にゆだねられ、標準化された評価・指導はなされていなかった。今回のGNRIを用いた評価方法は、簡便であり、妥当性が高く、スタッフの栄養に対する興味も高まった。同時に、標準化されたツールがあることで統一した評価が可能になった。GNRIにAlb・P・K・CTR・体重増加を加えたデータを継続的に評価し今後は、医師、栄養士を含めた栄養管理を実施していきたい。

P-192

2型糖尿病患者におけるリラグルド導入後のアンケート調査：導入前後の比較

名古屋第二赤十字病院 栄養課¹⁾、看護部²⁾、薬剤部³⁾、糖尿病・内分泌内科⁴⁾

○八神 雪正¹⁾、柚原 愛加¹⁾、畠山 桂吾¹⁾、甲村 亮二¹⁾、萩原 寛美²⁾、荒木 憲昭³⁾、垣屋 聡⁴⁾、稲垣 朱実⁴⁾

【目的】新たな糖尿病薬としてリラグルド（製品名：ビクトーザ(R)）が2010年6月に我が国でも上市された。リラグルドは、血糖コントロールを行い、体重減少作用や食欲低下作用を合わせ持つことから注目されている。今回我々は、リラグルドが食欲に与える影響と血糖コントロール、体重及び血糖値の変化を検討した。

【対象】当院外来通院中の2型糖尿病患者23名（男性11名、女性12名、平均年齢64.3±9.5歳（前治療：経口薬7例、インスリン23例）

【方法】リラグルドの導入時と導入1ヵ月後で、HbA1c、体重、空腹時血糖値、グリコアルブミンの変化、アンケートにて食事量、満腹感について調査をした。

【結果】HbA1c(NGSP値)は9.29±1.37%から9.27±1.67%、体重は71.6±13.9kgから69.0±13.4kg、空腹時血糖値は155.3±42.9mg/dlから134.1±30.6mg/dl、グリコアルブミンは24.0±7.4%から22.4±4.0%へと推移した。患者アンケート結果：投与後に「満腹感」が「ある」もしくは「ややある」と答えた割合は空腹時で65%、食前57%、食間61%であった。「食事量」については「減った」あるいは「やや減った」が朝食83%、昼食87%、夕食91%、間食96%と間食が最も割合が高かった。「治療」については前治療と比較して95%が「大変良い」または「良い」、投与タイミングについても94%が「大変良い」または「良い」であった。

【結語】本検討ではリラグルド導入により血糖コントロールを維持しつつ、食事摂取量と空腹感の減少、体重の減少が得られた。上記の結果は短期間での検討であり、今後も長期に及ぶ検討が必要であると考えられる。その後指導は継続しており、蓄積したデータも含め報告したいと考える。